

HOPE Bourgogne

Cluny クリュニー

文芸評論家

饗庭 孝男

あえば・たかお

1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。
著書に「石と光の思想」(勁草書房)、「自然・制度・想像力」「西欧と愛」
「経験と超越」「ヨーロッパとは何か」(小沢書店)、他多数。



ブルゴーニュ地方には中世の頃、全ヨーロッパにその名を知られたキリスト教精神の中心が二つあった。一つはクリュニー修道会であり、もう一つはそのあとにできたシトー修道会である。また、二つの修道会の本拠をへだてる距離は、わずか80キロにすぎない。時代的に見ると、むしろ前者は十世紀(909年)の創立であり、後者は十二世紀のはじめである。さしあたって今回はクリュニー修道会とその場所について語ることにしよう。

この修道会は南仏、アキテーヌのギョーム伯によって建てられたものであるが、幸いにもすぐれた院長たちに恵まれ、最盛期にはヨーロッパ全体に1500もの系列の修道院が生れた。オドン、マイヨール、オデイル、大ユグ、それに尊者ペトルスが211年間も信仰高揚の時期をつくったのである。

ヨーロッパがノルマン、マジャール、イスラムなど、外敵とたたかい、その侵入がほぼ終わった時期、衰退していた修道院を改革する上で、この修道会は見事に成功したと言えよう。彼らはしばしば土地の貴族の支配を受けがちであったかつての修道院の風習を正し、いわば世俗権と司教の介入をさげ、ローマ教皇権にのみ従属することを決め、ピラミッド形態をつくらせて修道院の自立をつよめたのである。その基礎に立ち、彼らは社会全体になりかわって「奉仕」と「礼拝」を行った。

とはいえ、このクリュニーも次第に金持からの寄進を受けて富裕となり、また東方的に典礼に時間をかけ、手仕事に時間を割くことが少なくなったこと、何ごとにも壮麗になりすぎたことが批判を受けるようになった。シトー修道会が、その反省の上に立てて全てを簡素化し、労働を重んじ、使徒的生活に回帰することを目指したのもそのためである。

とはいえ、盛期においては、このクリュニーに460人もの修道士が集り、単に典礼だけではなく、学問に精を出し、西欧の文化の中心の一つともなったことは重要であり、その中の一人に中世最大の神学者といわれたアベラルドゥスを数えることができる。しかし衰退は十四世紀頃から始まり、十六世紀のプロテスタントの「宗教改革」に伴う動乱によって荒廃し、財宝や図書館も暴徒にあらされてしまった。

今日、僅かに過去の栄光を偲ぶものとしては「聖水塔」「ジャン・ド・ブルボンの館」「庭園入口」「穀物倉庫」「フロマージュの塔」らがのこっているにすぎない。しかしその中の穀物倉庫には、現在、往時の見事な柱頭彫刻が系統だてて展示されており、聖書的主題をはじめ、ギリシャ、ラテンの諸学を象徴するものもあり、必見の遺産として知られている。

たとえば原罪を示すアダムとエヴの表情や「アブラハムの犠牲」の劇的性格、天国の川の流動性、音楽を示す人物と楽器のゆたかな表現や、四季をあらわす「春」の叙情的な美しさ等、かつてクリュニー修道院における芸術創造の質の高さを端的に示すもので

ある。

これらを眺めていると、私にはピレネー山脈両側のカタルーニア的な表現、あるいは同じ頃のブルターニュにおけるケルトの痕跡をとどめる表現とはことなり、いかにもローヌ河を遡ってきたヘレニズム的な文化の影響を思わずにはいられない。ここからブルゴーニュ地方におけるソーリュ、オートン、ヴェズレー等の優れた柱頭彫刻が生れてくるのである。

しかし、西欧全体に修道院をもっていただけに、単にヘレニズム的な影響があるばかりではない。クリュニーから12キロ離れた丘の上にある、この修道会の附属建物としてたてられたベルゼ・ラ・ヴィルの礼拝堂は明らかにビザンチン文化の影響がつよいものであり、たとえばイタリア、ラヴェンナのサン・ヴィタル教会に見るテオドラ王妃と似た像をもつ聖画がある。

それはクリュニーの聖ユグ(1049～1109年)が、イタリアのモンテ・カシーノにある聖ベネディクトゥス修道院で働いていた職人を呼んだという説を裏書しよう。当時、イタリアはビザンチン文化が広くゆきわたっていた。モンテ・カシーノはその中心の一つであった。そこからシチリアのモンレアーレにあるサンタ・マリア大聖堂の建設に多くの職人が行った事実を見ても明らかである。

クリュニー修道院には、他に回廊もあるが、往時を偲ぶ一つの指標である。少し鄙びた町にあり、まわりの風景も素朴である。シトーとなれば更に広々とたがやされた畑と林が目につく。かつては荒地だったのである。とはいえ、ブルゴーニュ地方の中心として、特に中世ロマネスク芸術に関心のある人は、まずここから出発し、オートン、ソーリュ、トゥルニユ、アンジ・デュ・ルック、フォントネ等の教会を巡ることになる。春の一日、ブルゴーニュの花咲く鄙びた丘や谷間の優しい雰囲気包まれたそうした諸教会は、いずれも独自の魅力によって訪れる人を惹きつけるに相違ない。

Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

16世紀のルネッサンス様式のシャトーを改装したホテルです。現在、ゴルフ、リゾートクラブ会員として日仏友好会員を募集しております。ルネッサンス・シャトーを軸として、何世代にも渡る日仏文化交流にご興味をお持ちの方はお問い合わせ下さい。

問い合わせ先: 関佐多商会 ブルゴーニュ事業部
TEL: 03-3586-8873 (東機質ビル内) 担当: 岩 沢

